

# 日本語版 CVSCALE の開発と心理測定学的特性の検討

論文番号：M-19  
テクノロジーデザイン講座  
上西研究室 江口 卓郎

グローバル化と文化的多様性の進展に伴い、国際的な協働や多様な顧客・人材への対応が日常化する中で、文化の差を前提とした意思決定や人材・組織のマネジメントの重要性は高まっている。従来は国や集団レベルの文化指標が参照されることも多いが、それを個人へ直接当てはめる推論には限界があるため、個人差として文化価値を測定できる尺度の整備が求められる。このような課題意識のもとで開発された代表的尺度の一つが、Individual Cultural Values Scale (CVSCALE) である。CVSCALE は、Hofstede の 5 次元（権力格差、不確実性回避、集団主義、長期志向、男性性）を個人レベルの文化価値として測定することを目的として、26 項目・5 因子からなる尺度として提案されたものである。一方で、文化価値を問う尺度は言語表現と切り離せず、英語で開発された尺度は他言語文脈での検証が必要であり、たとえば、タイやインドにおける検証は行われているが、日本での検証は行われていない。そこで本研究では、CVSCALE の日本語版を作成し、日本語話者サンプルにおける心理測定学的特性を検討することを目的とした。

翻訳・文化適応では、概念等価性と信号語の保持を方針とし、(1) 前訳、(2) ブラインド逆訳、(3) 差分点検、(4) 専門家レビューの 4 つのプロセスを経て最終訳を確定した。心理測定においては、確定した日本語版 CVSCALE を用いて日本語を母語とする学生を対象に調査データを収集し、順序カテゴリ応答として探索的因子分析と確認的因子分析により内部構造（構造的妥当性）を検討し、内的一貫性および測定モデル内の補助的指標を算出した。

その結果、5 因子相関モデルは概ね許容される適合を示し、日本語版 CVSCALE が想定する 5 次元構造は一定程度支持された。一方で、長期志向では一部項目の機能が弱く、内的一貫性も相対的に低いなど、当該次元の測定には課題が残った。また、不確実性回避と長期志向の近接が示唆され、次元間の弁別にも留意が必要であることが明らかとなった。そこで、機能の弱かった長期志向の一部項目を除外した短縮版を用いると、適合度や内的一貫性・収束指標が改善する傾向がみられ、長期志向の課題が特定項目に集中している可能性が示唆された。

以上より、本研究は日本語版 CVSCALE の内部構造と内的一貫性に関する一次的証拠を提示し、国内の異文化マネジメント研究や教育・組織行動研究における個人レベルの文化価値測定の基盤を提供したと言える。長期志向の項目機能と次元間弁別については、独立サンプルでの再検証と項目改善を含む追加検証が必要であるが、今後、教育研修やチーム編成、異文化協働の事前理解等において、国籍に還元しない個人差の可視化へ応用することが可能となる。